

熊毛地域に於ける糖業の発展 (Ⅱ)

再興後自家製糖期の糖業

萩 原 茂

(農政学及農業経済学研究室)

昭和55年 8月10日 受理

Studies on the Development of Sugar Industry at Kumage Region (Ⅱ)

Homemade sugar manufacture after its revival

Shigeru HAGIHARA

(Laboratory of Agricultural Economics)

目 次

1. はじめに
2. 甘蔗糖業の位置
3. 栽培面積および産糖量
4. 技術上の改良
5. 糖業と土地問題
6. 糖価の変動による糖業の攪乱

1. はじめに

本稿では糖業再興後、自家製糖期における発展について考察した。

熊毛地域の農業も日本資本主義の発展のなかで変化し、糖業はこれらの動きに規定されて発展してきた。そしてこの発展が同時に新たな問題や困難さをもはらんだ発展であって結局製糖資本の進出にも道を開いていくことにもなった。

地租改正後、明治期における盛んな耕地開発はこの農業の発展に道を開くものであったが、同時に村落共同体を崩壊に導くものでもあった。この解体に拍車をかけたのが高利貸資本であった。共同体の崩壊は生産から生活の全般に亘って自給部分を縮小させ、増々外部経済への依存を余儀なくさせていった。肥料や圧搾機等にみられる技術上の発展も外部経済への依存の高まりと軌を一にしている。

砂糖は国内自給部分の比重が小さく、国外に大きく依存してきたので世界的な政治的経済的動向の影響をまともに受け、糖価の異常な高騰とそれに続く下落を惹起した。そのためにここの糖業は過去に大きな熱狂と失望を二回に亘って経験している。第2次世界

大戦後の黒糖ブームの後に起きた生産意欲の喪失と衰退への動きのなかでみられた製糖資本の進出は新たな発展への契機となった。

だが進出してきた製糖資本には土地所有、土地利用の問題についての解決能力があるわけではなく、依然として共同体解体による発展のなかで進行した矛盾が解決されないままに現在にいたっているのである。そこに今日の糖業に於ける諸困難のよってきた根本的な原因があるといえよう。

かように発展のなかに衰退の、衰退のなかに発展の契機が見られるのであるが、本稿ではかかる観点から全体を論じたわけではなく、全く部分的に論及できたにすぎない。また製糖資本の進出にいたる過程を跡づけようという意図をもちながらも結局、多くは推移を単純に追うにとどまってしまった。

2. 甘蔗糖業の位置

甘蔗糖業が熊毛地域の農業のなかで占めてきた位置を土地利用の面からみたのが第1表である。この表は畑面積及び主要農作物作付面積のなかで甘蔗作の占める割合が第一次世界大戦期をピークとして、その後一進一退をくりかえしながらも漸次衰退の傾向を辿ってきたことを示している。

この表では示していないが、甘蔗の作付状況は種子島と屋久島の間にはかなりの相違があった。明治26年に於ける主要農作物作付面積のなかでの甘蔗作付面積の比率は熊毛郡(種子島)が9.9%であったのに対し、馱謨郡(屋久島・口永良部島)は3.6%に過ぎなかった。この差異は若干の変動はあっても基本的には一

第1表 甘蔗作付面積の比率
Table 1. Rate of planting area of sugar-cane

年次	田 Paddy field	畑 Upland field	計 Total	主要作物の 作付面積 a)	うち甘蔗 作付面積 b)	甘蔗作付面積 畑 面 積 c)	甘蔗作付面積 主要農作物 の作付面積 d)
1897(明30年)	2,504.5町	6,569.5町	9,074.0町	8,167.9町	889.9町	13.5(%)	10.9(%)
1902	2,377.7	7,159.2	9,536.9	7,326.1	1,047.4	14.6	14.2
1907	2,689.7	8,427.7	11,117.4	8,323.6	492.0	5.8	5.9
1912(大1)	2,747.5	8,615.9	11,363.4	11,029.9	1,187.2	13.8	10.8
1916	2,784.3	8,602.3	11,386.6	11,969.1	1,808.4	21.0	15.1
1921	2,887.4	8,772.1	11,659.5	10,490.7	887.4	10.1	8.5
1926	2,942.0	9,199.9	12,141.9	10,285.0	825.0	9.0	8.0
1930(昭5)	2,870.9	6,294.4	9,165.3	11,274.7	648.0	10.3	5.7
1935	2,952.1	6,687.4	9,639.5	11,875.8	639.4	9.6	5.4
1939(昭14)	2,932.8	6,673.2	9,606.0	11,273.6	593.6	8.9	5.3
1955(昭30)	2,891.2	9,550.6	12,441.8	14,650.3	997.0	10.4	6.8

昭和14年までは鹿児島県統計書，昭和30年は鹿児島農林水産統計年報及び県農政部農産蚕糸課，園芸課資料による
Source; 1. Statistics by Kagoshima prefecture.

2. Statistics by Kagoshima branch office of the Ministry of the Agriculture and Forestry.

Explanations of a), b), c) and d) are described at the end of this report.

貫して存続したものと考えられる。

甘蔗作の位置をもっと正確に知るために各作物の作付面積を多い方から順にあげてみると，甘蔗以外の作物間で入れかわりはみられるが甘蔗の作付面積は明治30年，大正5年，昭和14年，昭和30年のいずれの年をとっても第4位であった。明治30年・米・麦・甘藷・甘蔗の順，大正5年には麦と甘藷の位置が入れかわり，その後は昭和14年，昭和30年の各年次に於ても同一順位となっている。

桑園は明治30年の統計で既にみられるが，明治末には落花生，大正末にはナタネ，茶等がみられるようになってくる。昭和初期には麦，甘藷，落花生，とくに養蚕が盛んになり，砂糖は労力の関係や価格が安くて引合わないという状況がみられるようになる。昭和14年にはタバコが導入され，昭和30年頃になると柑橘類がふえてくる。

このような変化のなかで甘蔗の作付面積は第4位を保ち続けてきたのである。甘蔗は作付面積でみる限り4位に過ぎなかったが，農家経済にとっての重要性という点からみると可成り趣を異にしていた。

大正7年に北種子村（現在の西之表市）を調査したときの報告書には甘蔗糖業の重要性について次のような記述がある。

「甘蔗作ハ本村ニ於テ…米作ト匹敵スル如キ地位ニ立チ金融流通ノ時期ヲ砂糖時ト称スル位ニシテ如何ニ

本村農家ガコレニヨッテ経済ヲ豊カニシツアルカヲ知ル可シ…近時米作ニ代フルニ甘蔗作ヲ以テスル農家サヘアリ，甘蔗時ニ至レバ仲買商続々鹿児島ヨリ入り来リ，ソノ買占ニカヲ致ス，他ノ穀物等ハ売却ニ左程頼着セザル農家モ甘蔗糖取引ニハ時価ノ変動ニ注意シテ売却ス¹⁹⁾」と述べている。

この頃は第一次世界大戦によって生じた砂糖ブームの時であるから，このように何よりも砂糖が重視されたのは当然のことであったといえようが，甘蔗の栽培面積が大幅に減少した大正14年頃においても「甘蔗糖業が余り有利でなく販売方法にも問題があり所得は微々たるものにもかかわらず…陸稲，甘藷，水稻，麦，悉く自給自足的のものである。独り市場生産として稍注目に値するものは甘蔗である²⁰⁾」というように現金収入源としては甘蔗糖に大きく依存していたのである。

昭和4,5年頃になると「熊毛郡の主産物たる黒糖は7,8年前の最も生産額の多かった当時に於ての年産額は約70万円を挙げていたのが今日の状態としては糖価の下落，害虫害の打撃，更には農家経済の行詰りに原因する生産不振の為漸く10万円に過ぎぬ²¹⁾」といわれるようになったが，そういう状況の続くなかでも屋久島では「甘蔗栽培ノ価値タルヤ甘藷ノ次ニ位シ，水稻ヨリモ重要ナル地位ニアリ⁷⁵⁾」とされ，或いは又「甘蔗ハ本郡ニアリテハ甘藷，蕎麥ニ次グ重要産物（昭和10

年)⁵⁾」であるといわれ、南種子村では「砂糖ハ本村移出主要産物ノ首位ヲ占メ之ガ消長如何ハ直チニ農家経済ニ重大ナル関係ヲ有シ (昭和14年)⁴⁴⁾」ともいわれた。

第二次世界大戦後には第一次世界大戦時に続いて第二回目の砂糖ブームを迎え極めて異状な状況が展開され、砂糖は農家経済にとってその重要性は以前とは比較にならないほど決定的なものであった。

砂糖ブームが去ってからも農家の甘蔗糖業に対する期待は依然として続いた。農家は「1斤40円を割る安値にまで追い込まれ生産費をカバーし得るかどうか、危ぶまれるような最近〔昭和28年〕の事態に立ち到ってもまとまった金が入るからといって甘蔗栽培を放棄せず、種子島の農業から甘蔗を切りはなすことは考えられない³⁹⁾」とみていたのである。

糖価下落と相前後してここの糖業を苦況に追い込んだのは燃料として利用されてきた松材がパルプや坑木用として需要が高まり価格が急騰し、熊毛全島過伐によりはげ山が続出し、燃料の集取が困難となり、また砂糖の生産費中に占める燃料費の割合が44%にもなった⁴⁾、ということによってであった。昭和29、30年に作付面積の減少がみられるのはかかる事情によるものと考えられるが、甘蔗糖業は「現金収入の王座」「生命作物」だということが永年の体験から人々の頭に強く焼き付けられていたことが幸いして甘蔗糖業を消滅から救い、新しい発展の方向を実現せしめていったのである。

かように製糖と分離しては存在しえなかった甘蔗糖業は作付面積の順位に於いてみられた以上に重要な位置づけがなされてきたのである。

3. 栽培面積および産糖量

第1図は栽培面積の推移を示したものである。復興後の自家製糖時代を理解するために、復興前と栽培加工両過程が分離されてから現在に到る動きも図示した。先ず最近の場きについて若干ふれてから自家製糖期に起った特徴的な諸問題について述べたい。

農工両過程が分離されたことにより、栽培面積はそれまでかつてみられなかった増加となり、ピーク時の昭和41年には3,300ヘクタールを越えた。しかし砂糖の貿易自由化等による価格の低迷が続くなかで昭和48年には2,000ヘクタールを割り、糖業の自然消滅という声も聞かれるようなこともあったが最近にいたってまた3,000ヘクタール台に回復してきている。

栽培面積の推移は糖価の変動と大きくかかわってい

るので価格について考察する際にあらためて取上げるので、ここでは図表のなかの特長的な時期に限って、今迄明らかにしえたことについて述べたい。

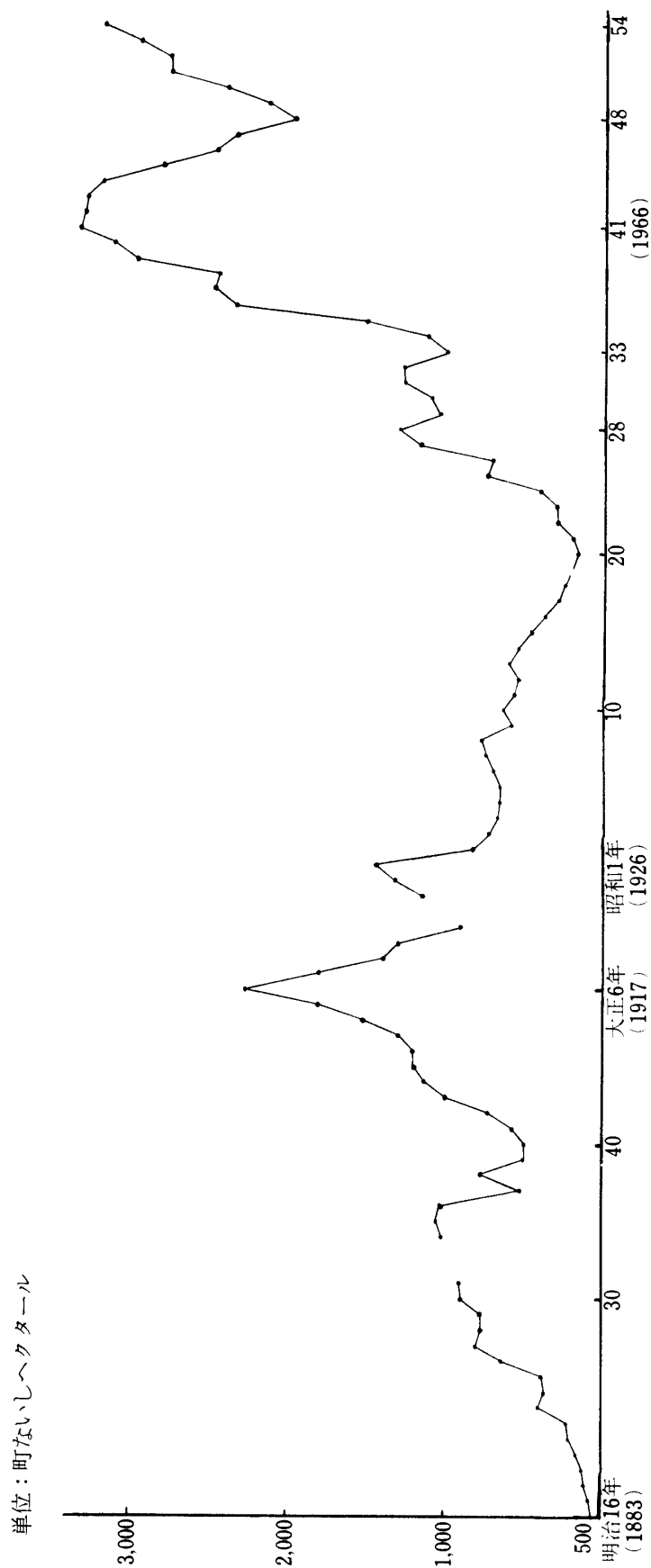
(1) 明治36年以降数年間の低迷は34年に施行された砂糖消費税がかかわっているように考えられる。「砂糖消費税施行の結果、糖価を高めて、国内の消費量を一時減退させ、衰運に拍車を加えたことも容易に想像される。……農民の常として消費税法施行の結果による製糖額等の官府届出の煩勞を嫌悪して製糖業を廃止した地方もあった位である¹³⁾」

当時の種子島視察記に「種子島が砂糖の産地として最も適当して居る事は…琉球も大島も到底及ぶ所でない…然るに収穫が甚だ少ひ、現に老反歩の甘蔗畑より砂糖の出来るのは平均すると僅かに五百斤…之に消費税迄も負担する事になるとすれば到底利益を見る事は出来ぬ故に種子島の砂糖は年々退歩の姿に成て居る³⁷⁾」とあり、消費税が糖業にとって大きな負担となっていたといえよう。

(2) 大正6年のピーク時には2,200町歩を突破している。この面積は大型製糖工場進出以前の全期間を通じて最大の作付面積であり、第一次世界大戦中の価格の暴騰により極めて異状な反別増加となって現われた。

(3) 第一次世界大戦期を過ぎると作付面積は急速に減少していくが、これが原因として甘蔗の害虫チンチバックによる甚大なる被害と糖価の下落が指摘されている⁵⁰⁾。昭和5年からは支庁に専任技術員をおき、郡内10ヶ所に糖業経営改善指導組合を組織し⁵¹⁾、また昭和6年には農業試験場の熊毛分場の設置がきまるなど種々の方策が構ぜられたけれども糖価安のため大きな成果をあげることはできなかった。その後は戦時経済下にはいり「一層勞力不足ニ拍車ヲカケ…稍トモスレバ耕地ノ荒廢ヲ来ス怖レアリテ⁴⁵⁾」という状況がみられるようになる。「昭和13年より農地統制法が布かれ甘蔗作付面積も漸次縮少の余儀なきに至ったが、昭和15年からの糖業の小規模化はいちじるしく、戦争が苛烈となった17年からは作付反別も激減⁵⁹⁾」した。

(4) 第二次世界大戦後、砂糖価格が暴騰し熊毛郡にも再び黒糖ブームがやってきた。この時期の実際の栽培面積は図表に示したよりも多いと思われる。鹿兒島年鑑(昭和25年)では昭和22/23年期の栽培面積が第1図に示したよりも200町歩多い500町歩となっている。また熊毛支庁の砂糖累年生産高調査では昭和22年は291.1町歩、23年は305.9町歩となっていて図表の面積を上廻っている。更に昭和28になっても「キビ



第1図 甘蔗栽培面積推移

Fig. 1. Transition of the growing area of sugar-cane.

面積単位 大正期までは町，昭和期はヘクタール

明治25年まで県勸業年報，以降大正期までは県統計書，ただし大正12, 13年は大日本農会「農産彙報」第31号による。

昭和期は県農政部「南西諸島の糖業」および「さとうきびならびに甘しゝ糖生産実績」による

Source; 1. Statistics of Kagoshima prefecture

2. Materials from Japanese Agriculture Association

耕作者の多くは耕作反別をゴマかしており…隠し畑が多いため各町村で発表するのは610町歩となっているが恐らく1,900町歩は作付されているものと思う⁵⁴⁾」という指摘もあり昭和20年代の栽培面積は信憑性に欠けたものといわざるをえない。むしろ第一次世界大戦期にみられた栽培面積と同程度の2,000町歩前後が実際の面積に近いものであったのかもしれない。

第2表は産糖量の推移を示したものであるが、鹿児島

県統計書に記載されていない年度の分は糖業概覧、熊毛郡沿革誌、農産彙報等によって補った。これらの資料間で産糖量に違いのある年度がみられるので併記した。産糖量の推移のなかでいわれていることは作付面積の推移の場合とほぼ同一と考えられるので重複をさけ論及しないが、明治の再興期以降はそれまでの黒糖だけでなく白下糖も造られるようになったのでその推移について若干ふれておきたい。

第2表 産糖量の推移(単位:斤)

Table 2. Transition of quantity in sugar production (Unit: kin=602g)

	鹿児島県 統計 ¹⁾	農商務省 糖業概覧 大正8年 ²⁾	熊毛郡 沿革誌 昭和7年 ³⁾	大日本農会 農産彙報 第31号 ⁴⁾	南西諸島の 糖業 (県農政部) ¹⁾	砂糖果年生 産高調査 (熊毛支庁) ⁵⁾
1883(明治16年)	101,856					
17	150,340					
18	259,187					
19	281,127					
20	413,987					
21	626,767					
22	848,240					
23	1,418,901					
24	1,277,394					
25	1,518,906					
26	2,154,531					
27	1,511,069					
28	1,895,994					
29	2,005,006					
30	2,559,506					
31	2,375,575					
32						
1900(明治33年)	1,873,075					
34	2,113,844					
35	2,338,719					
36	2,282,613					
37	1,843,375					
38	1,858,250					
39	1,083,550					
40	1,667,875	1,667,875				
41	1,684,031	1,684,031				
42	1,908,044	1,908,044				
43	1,971,406	1,971,406				
44	3,360,863	3,360,863				
1912(明治45年～ 大正1年)	3,678,369	3,678,337				
2	4,855,844	3,979,493				
3	3,522,438	3,522,437				
4	4,854,625	6,061,287				
5	7,067,056	7,067,056				

	鹿児島県 統計	農商務省 糖業概覧 大正8年	熊毛郡誌 沿革 昭和7年	大日本農会 農産彙報 第31号	南西諸島の 糖業 (県農政部)	砂糖累年生 産高調査 (熊毛支庁)
1917(大正6年)		4,341,912	4,341,912			
7			3,048,238			
8	2,958,850		2,958,850			
9	3,390,388					
10	3,310,156					
11	3,718,706					
12				3,301,351		
13	3,317,837			3,217,827		
14	2,876,250			2,876,208		
1926(大正15年~ 昭和1年)	2,446,119		2,446,119	2,246,280	2,446,667	
2	1,902,406		1,402,406	1,902,406	1,901,667	
3	2,008,013		2,008,013	2,008,012	2,008,333	
4	1,854,113		1,536,944	1,756,863	1,536,667	
5	1,535,831		1,847,817	1,847,817	1,848,333	
6	1,928,838			2,649,302	2,645,000	
7	2,797,344			2,552,500	2,668,333	
8	2,345,081				2,433,333	
9	1,334,144				1,378,333	
10	2,079,613				2,188,333	
11	2,580,406				2,466,666	2,467,124
12					3,198,333	3,198,279
13	3,242,088				3,368,333	3,368,062
14					1,953,333	1,952,249
15					1,416,667	1,416,602
16					1,546,667	1,213,292
17					446,667	446,466
18					343,333	342,503
19					587,667	587,462
1945(昭和20年)					525,000	525,587
21					1,031,667	1,032,139
22					1,045,000	1,045,122
23					1,556,667	1,557,381
24					1,841,667	1,841,421
1950(昭和25年)					3,750,000	3,750,000
26					3,456,667	3,546,393
27					12,000,000	12,000,000
28					12,000,000	12,000,000
29					6,851,667	6,288,000
30					8,263,333	7,829,000
31					7,433,333	8,263,000
32					6,233,333	6,689,000
33					9,001,667	9,000,513
34					9,056,667	9,590,415

Source; 1. Statistics by Kagoshima prefecture.

2. Sugar industry statistics by the Agriculture and Commerce Ministry.

3. Historical record from Kumage region.

4. Materials by Japanese Agriculture Association.

5. Data from Kumage blanch office.

白下糖は明治29年にいたるまで種子島だけで造られていて屋久島等ではみられない。その後の経過は種子島、屋久島等は同じく新設の熊毛郡に統一されたので郡統計ではわからなくなってしまった。

白下糖の生産は種子島では明治25年において既に砂糖生産量の43%を占めるまでになっていた。これは熊毛、馱謨両郡をあわせた産糖量のなかで40.9%になる。その後30年63%、31年には72%にもなった。31年の72%が最高で、その後明治期にあっては殆んどの年次において50%を越えていたが大正期にはいと50%台を割るようになり昭和1年27%、同10年23%と漸次減少し、黒糖が優勢を示すようになった。第二次世界大戦後においては白下糖も若干つくられたが、殆んどは黒糖であった。

4. 技術上の改良

(1) 試験研究および普及体制

明治18年、種子島、屋久島は鹿児島郡役所の所管を離れ、大島郡金久村におかれた金久支庁の管轄下にはいり、西之表にはその出張所が設けられた。明治19年には金久支庁が廃され、大島島庁が置かれたので其の管轄に移されたのであるが、明治22年の町村制実施の際大島島庁の管轄から離れて、熊毛、馱謨両郡を管轄する郡役所が西之表におかれ、更に30年には熊毛、馱謨両郡が合併して現在にいたる熊毛郡の地域ができたのである⁶⁰⁾。

金久支庁管轄下にはいったとき西之表の出張所に糖業技術員を吏員として置き指導体制を強化したといわれる。農商務省の大島糖業模範場が設置されたのは明治35年（1902）7月であるが、種子島では明治43年になって郡費による糖業専門技術員を常置することになった。其の後は随時短期製糖講習会を開催して技術員の養成や製品の品質統一改良に力をそそいだ⁶¹⁾。鹿児島県治概要（大正6年）に「専門技術員を設置シ大ニ糖業ノ改善ニ努メタル結果最近著シク其ノ実績ヲ挙クルニ至レリ」とその努力を評価している。

種子島の同業組合は明治45年（1912）に発足しているが、この組合は甘蔗栽培者、砂糖製造者、砂糖販売者等で組織されたもので甘蔗栽培、砂糖製造の改良方法、砂糖の共同販売、販路の拡張、肥料などの共同購入、砂糖の検査等を行った⁶²⁾。この同業組合は頗る順調な経過を辿り種子島糖業の発展に寄与する所が大きかったといわれる（中種子町上門安也氏資料）。

農事試験場熊毛分場が設置されるにいたったいきさつは次ようなものであった。

「昭和5年から三千五百円程度の政府の助成を得七千円の経費で行った熊毛郡糖業奨励の結果の顕著なる実績に刺戟され熊毛郡各町村では郡内に設置費四万二千円程を負担し、農事試験場分場設置を要望し六年度より設置をみた²⁴⁾」のであった。糖業奨励の内容は先述のとおり支庁に専任技術員をおき郡内十ヶ所に糖業経営改善指導のための組合を組織するというものであった。

分場の設立は昭和6年10月1日に農林省から認可されたが⁶³⁾ 当時は不況のため事業は昭和8年4月から開始される運びとなった。試験場の事業のなかで糖業関係は甘蔗原圃二町歩の敷地購入費が昭和六年度の国庫金額補助で認められ、また七年度において製糖研究設備として建物金額二千百円の補助指令をうけている²⁵⁾。

熊毛の糖業振興については県農事試験場長にとっても重大な関心事であったようである。内藤場長が「熊毛の糖業は昭和五年以来毎年国庫補助金を得てゐたが大島振興計画の傍枝をくひ助成金が貰えなくなったので国庫補助継続と増額の為種々交渉した…その結果二千円程度の国庫補助を続けられることになり、猶県自体として十年度より相当の補助金を支出することになったから、難局に立つ熊毛糖業問題も暫定的には解決されたわけだ²⁶⁾」と話していることからわかるように試験場が熊毛糖業の諸問題の解決のため果たした役割は大きかった。

(2) 品種改良

品種改良については永年に亘り可成りの努力が払われてきた。明治中期頃までは「トウキビという外皮暗紫色で濃厚な味を持ったものがあった」「明治中期頃にオガサワラオオギ（小笠原蔗）という大茎種に似たよい味の蔗が移入され、ほとんど同時期に普通種（在来種）が奄美大島から伝わった（屋久町郷土誌）。

「当初地オーギであったが明治二十年頃大島から導入したものが読谷山でありそれが明治、大正、昭和の初期まで栽培された」（西之表市百年史）。

屋久町に読谷山種が導入されたのは「大正初期に読谷山種が移入され」（屋久町郷土誌）たとあり南種子町には「明治四十年頃にヨシタンザーが入って来た」（南種子町郷土誌）とある。農産彙報第31号には「大正六年沖繩県ヨリ読谷山種ヲ移入し全郡ニ普及セリ⁶⁴⁾」とある。

導入時期についてこのような相違がみられるが、読谷山種は「在来種に比し格段の増収があった」（屋久町郷土誌）「これは地オーギと呼ばれる竹蔗に較べる

と収量は格段の伸びであった(西之表市百年史)といわれている。しかし、読谷山種は大正7年頃から発生し始めた甘蔗の害虫チンチバック(農商務省は大正13年3月にこの害虫に対して甘蔗小翅椿象と命名した)には弱く大きな被害を蒙り、防除法もはっきりしていなかったこともあって種子島の甘蔗糖業を絶望視させるという事態にたちいたった⁷²⁾。

読谷山種に代る品種として「昭和6年大島糖業講習所ヨリ大茎種の種苗三反歩分ノ配布ヲ受ケ昭和7年ニハ同ジク一町歩分ノ交付ヲ受ク、現在熊毛分場ニテ原苗圃ヲ設置シ普及ニ努メツツアル⁷³⁾」。その結果は「大茎種の輸入栽培で害虫の被害も少くなり収量品質も良くなり生産が増加してきた⁵⁷⁾」といわれたように大茎種は害虫チンチバックに対しては抵抗性のある品種であったようである。

甘蔗の収量には各種の要因が関係するので品種との関連で断定的なことはいえないが、鹿児島県統計書の甘蔗作付面積と蔗茎収量から算出した甘蔗の反当収量はこれら品種の導入とこれが普及を反映したものになっているようである。

甘蔗の反収は明治35～39年の平均3.1トン、40～44年平均5.6トン、45～大正5年平均4.1トン、大正8～11年2.5トン、昭和10～14年2.7トンであった。大正初期は読谷山種の普及、そして大正中期以降の反収減は糖価の低落と害虫による大被害、そして若干上向きに転じ始めたようにみえるのが昭和10～14年でこれは大茎種の全体的な普及の時期にあたる。

(3) 肥 料

明治40年、42年には甘蔗の反収が6トン台になっている。その後平均反収6トンという高い反収は昭和35/36年間にいたって漸やく達成されたのである。明治40年、42年の平均反収6トンというのは「私が牛車の頃、読谷山を作って良い畑で反当800斤の黒糖を製造した。その時の歩留りはほぼ8%位であった(西之表市、牧瀬直三郎氏談、昭和46年(1971)8月3日)」というときの甘蔗の反収が6トンであり平均的に達成されたものかどうか疑問が残るが、糖業が有利なときはその多くは上畑に栽培したことも事実であろう。

大正初頃までの甘蔗の施肥は、「種子島は、耕地は今程広くなく山林原野が広がったから植溝に家畜に踏ませた野草を入れたり、それが間に合わないときは直接刈敷を入れていた(中種子町、上門安也氏談、昭和46年(1971)8月5日)」という。

種子島で馬耕が始まったのは明治19年のことであったが⁴⁸⁾、馬耕技術と同時に畑かんと施肥を一緒にした

ようなやり方を池田常次郎という人が教えた。作場には3反歩から5反歩に1個所、幅が1間乃至1間半、長さが2間乃至3間ある三和土でつくった溜があった。屋根は藁屋根であったが降った雨を竹の樋で溜に導くようにしてあった。これはいたる所でみられたものである。その溜に時々人糞尿を入れた「オウセダル」を馬に背負わせて運だこんでいた(中種子町・上門安也氏談、昭和46年(1971)8月5日)という。雨水で薄められた人糞尿が甘蔗の追肥として施され、甘蔗の収量を高めるのに大いに役立ったものであろう。

大正中期になると購入肥料も使われるようになってきた。「元肥としては大豆粕、油粕、米糠、硫曹〔過磷酸石灰〕堆積ノ中適宜配シ、又単独ニ施用ス¹⁵⁾」。このように購入肥料も施されるようになってはきたが「堆肥作りの向上と共に蔗の産額も漸増した⁶⁴⁾」といわれるようにその多くは自給肥料に依存していた。

堆肥増産運動は農会事業として行なわれであり、その内容をみると「肥料は金肥ヨリ堆積肥料ノ如キ自家肥料ヲ用フルコト」堆積肥料の奨励方法として「雑草ヲ堆積スルコト、肥料溜ヲ毎戸一ヶ所以上設置ノコト、田畑へ肥料ヲモチ出シ帰宅ノトキ雑草及牛馬糞ヲ持帰ルコトなどとなっていた¹⁶⁾。

堆肥と人糞をうすめた水肥、これらの自給肥料による施肥体系がくずれ始めるのは昭和の初頃硫安が使われるようになってからであろう。「昭和の初頃の購入肥料としてはその殆んどが硫安と硫曹〔過石〕であった(西之表市、牧瀬直三郎氏談、昭和46年(1971)8月3日)そして生産をあげるために購入肥料の必要性が説かれるようになる。

内藤県農事試験場長は「甘蔗の反当施肥額平均は僅か一円五十銭従って反当生産額は漸く砂糖一樽半から二樽といふみじめな有様…反当五・六円の施肥を為せば六・七樽の生産を挙げやうことは島民として充分承知してゐながら、その資金がない…²⁷⁾」と述べている。昭和10年には標準施肥例の1つとして、反当堆肥300貫、硫酸アムモニア10貫、過磷酸石灰10貫、そして堆肥は全量元肥に硫安、過石は追肥として2回に分施する⁸⁾ということが示されている。

(4) 製 糖

前号で明治29年までの製糖場(搾車)数を畜力、水力別にみて水車の数がふえつつあることを指摘しておいた⁴³⁾。明治32年以後昭和21年に到るまで動力原別の製糖場数は統計に示されていないので総数だけみていくと、明治29年239、同33年266、同42年211(明治期における最低数)、大正5年331(全期間を通じて最高数)

第3表 製糖場(搾車)の推移

Table 3. Transition of the number of sugar manufactory (wheel for press juice from sugar-cane).

		畜 力	水 力	動 力	計	うち工場能力10トン以上 Pressing capacity over 10 ton per diem
		Draft animal	Water power	Engine power	Total	
1897(明30年)242	1947(昭22)年	34	56	49	139	
1902	256	1948	35	49	48	132
1907	221	1949	33	35	75	143
1912(大1)	236	1950	21	30	103	154
1916	331	1951	25	27	121	173
1921	276	1952	24	24	129	177
1926	251	1953	18	21	142	181
1930(昭5)	198	1954	14	16	156	186
1935	203	1955	8	10	172	190
1938(昭13)	133	1956	5	7	184	196
		1957	4	6	171	181
		1958	1	6	162	169
	1958(昭34)	2	7	130	139	1 (中種子150トン工場) 1 (" 200 ")

昭和13年までは鹿児島県統計書, 22年以降は熊毛支庁資料

Source; 1. Statistics by Kagoshima prefecture.

2. Data from Kumage blanch office.

から昭和13年は133へと激減した(第3表参照)。戦後の動力源別推移は第3表のとおりである。

昭和10年の報告には「製糖所ノ数 193, 製糖能力モ区々ナルヲ以テ概ニ記載シ難キモ, 水力ヨリ蔗茎ノ圧搾ヲ行フモノ42%, 畜力(馬)ニヨルモノ57%テ動力ニヨルモノ現在民間ニハ皆無ナリ⁹⁾」とあり, 明治31年に水車製糖所の割合が43%にもなっているから既にこの頃に水車製糖所は限界に到達していたのかもしれない。

水車の利用には「中種子ではみられたが, 西之表に水車のあったことを覚えていない」(西之表市, 牧瀬直三郎氏談, 昭和46年(1971)8月3日)といわれているように種子島々内でも地域差がみられた。昭和22年の水力(水車)製糖場は中種子26, 南種子14, 下屋久11, 上屋久3, 西之表2, 計56で明治31年の水車110にくらべて動力の普及によって半減しているけれども以前からの水車普及の地域差は昭和22年の水車数で示されているものとあまり変わらないとみて間違いなからう。

牛車については「種子島のそれはずっと昔のことはわからないが牛にひかせるのではなくて馬にひかせていた」(西之表市, 牧瀬直三郎氏談・昭和46年(1971)8月3日)というように近年牛にひかせることはなかったようである。しかし牛に以前ひかせていなかったかということ, そうでもないように考えられる。種子島

の水田で馬耕を始めたのは明治19年で基永地区が最初であったが, 馬耕の前は牛耕であった⁴⁹⁾というから搾車の場合も馬耕が始まってから以後牛から馬に代ったものであろう。

製糖場は殆んどが共同で所有していた。昭和10年に「郡内百九十三ノ製糖所アリテソノ殆ンド全部ガ数戸乃至十数戸ノ共同製糖所¹⁰⁾」であるという報告がある。西之表の30数戸の或部落の例では牛車は大体5, 6戸の共同所有で, 共同して製糖に従事していたという(西之表市, 牧瀬直三郎氏談, 昭和46年(1971)8月3日)下屋久村の製糖工場は昭和22年には水力11, 動力4であって動力の導入前に牛車は水車にかわっていたようである。昭和6年の調査では「圧搾機ハ三連輪デ水力ニヨリ運転ス⁷⁶⁾」とあり, 畜力による圧搾については全くふれられていない。

下屋久村の水車製糖場は部落の共同所有であった。「各部落ニ於テハ各員共同シテ製糖場ヲ建造シ…製糖場ハ各部落1~2個有ス, 個人的ニ所有スルモノハナクシテ凡テ部落有トシ…⁷⁷⁾」「各部落ノ産糖量ノ如何ニ依リテ其ノ製糖場ノ数ヲ異ニスルモノナリ」「例外的な個人的な所有は開墾地方に少数みられた」という⁷⁸⁾。

動力圧搾機が導入されたのは昭和10年からであるが昭和10年, 「動力ニヨルモノ現在民間ニハ皆無ナリ¹¹⁾」とあり, 当時, 動力製糖は農事試験場熊毛分場以外に

はなかったようである。

牛車から動力へ変っていったときの経過を西之表市の上石寺部落の例でみると、最初のきっかけは製糖の際の水汲み労働が大変だったということで水の不便な製糖場を整理したことが動力圧搾機の導入へと進展し、それが製糖場の所有まで変化させたのであった。

「部落には以前牛車が六ヶ所あった。それを三ヶ所にへらしたがそのときの事情は圧搾機のパフォーマンスが良くなったとかいうこととは無関係で、製糖の際は終了後鍋を洗うために水がかなりいるので、水の便の悪い所では夕方の水汲みがとても大変だったから三ヶ所に整理した。ところが今度はそれまで三月末までで済ませていた製糖が4月までもかかり田植と重なることになり人手不足とはそんなに関係なく動力圧搾機に切り換えることになった。動力製糖場になってから能率はあがるようになったが製糖の時の労働時間は相変わらず朝3時頃から夕方は6時頃まで。遅い人は夜の8時、10時までもかかるという長時間労働であった。そして1つの動力製糖場になったとき、それまで5～6人の共同所有であった製糖場は部落の共同所有となった」（西之表市、牧瀬直三郎氏談・昭和46年（1971）8月3日）。

分蜜糖工場進出前における製糖工場は99%まで部落所有であった（鹿児島県農政部、牛野昭夫氏談、昭和46年（1971）5月12日）といわれているなかにはこのような経過をへたものも可成りあったのではなかろうか。

個人所有の製糖場がみられるようになったのは戦後のことで（中種子町、上門安也氏談、昭和46年（1971）8月5日）昭和28年の調査では個人工場、農協工場において生蔗販売によるもの、委託加工を行うもの等もあるが大部分は農家の共同工場において「ゆい」の形態で加工される⁴⁰⁾もので個人の製糖場は極めて少なかった。

戦後の砂糖ブームが過ぎてしまうと黒糖独自の需要の減退、価格の低落等で先行き不安となってきたが、一方製糖コストの面でも厄介な問題が生じた。

熊本地方では砂糖製造の際、従来燃料として松が使われていたが、砂糖価格が下落し始めた昭和27年後前から松材はパルプ用、杭木用として需要が高まり価格が急騰し、松の伐採は日々増加し熊本全島はげ山が続出し、水源涵養林、魚付防風林等としてそれまで役立ってきた松林までも伐採されるようになった。松の値上がりによって製糖の際の燃料費（松材の価格）が砂糖の物的生産費中に占める割合が40%以上にもなるようになった。しかもこれは原木の価格であるから薪とし

て利用するためには「松を薪にする際はよく燃えるようにするため皮をはいだ⁶⁷⁾」というように更に多くの手間がかかった。砂糖4千斤を製造するための燃料の準備に30日位の労働を費していたというから、これらを計算すると全くのタダ働き同然のなかでの製糖になってしまい、苦勞して砂糖をつくるより松は直接売った方が得だということになってきたのである²⁾。

このようななかで共同製糖場の解体を促す要因も顕在化してきたものであろう。砂糖生産量の大小による矛盾が共同製糖の下ではそれまで表面化しにくかったが、糖価安、製糖用燃料の高騰によって共同製糖による利益は殆んど期待できないようになったため共同製糖に対する不満がでてくるようになった。

共同製糖場では大体1日（10数時間）で2反歩分位の蔗茎を処理していたが、1反歩作っている人の場合はそれに見合う分だけ他の人の製糖の際働けばよいのだが共同で製糖してきた従来の慣習からそのように出来ず、少い面積の人が余計働かねばならない、多く作っている人が得をするということで共同のマイナス面が表面化してきて「共同製糖場の封建制」云々という非難の声があがるようになった（中種子町、上門安也氏談、昭和46年（1971）8月5日）。

かかる推移のなかで大型製糖工場進出前に、既に共同製糖の将来には新しい展望を見出せないような状況が生じてきていたようである。

5. 糖業と土地問題

(1) 耕地開発

熊本郡は明治以降、耕地開発が盛んに行なわれた地域である。全国の耕地面積は明治30年を100としたとき昭和1年には113になっている。これを畑についてみると120である（日本農業基礎統計）。ところが熊本郡は耕地全体で134、畑は140にも伸びたのである（鹿児島県統計書）。熊本郡の耕地面積は明治20年から25年の間に1177.5町歩、同25年から30年の間に1,437町歩、30年から40年の間に2043.4町歩も増加しているように、明治期には開墾による耕地開発が極めて盛んに行なわれた。耕地開発では畑の開墾だけでなく水田も開墾によって造成されている。種子島での水田の造成について次のように述べられている。

「本島農業中著しく面目を改めたのは田地開墾の事業とす…近き過去五年前に於ては専ら天然の地勢に依り自然に土地湿润なるか或は河溝沼池等の利便に非されば田地に開墾するものなかりしが近来……曾て夢想にも思はざりし原野荒地を以て遠く数町の山麓より水

を引き萍〔茫〕茫たる一面の良田と成せるもの藪からす…³⁸⁾」と。

耕地面積が最も多くなったのは昭和1年の12,141.9町歩で昭和5年には急減して明治32年頃とほぼ同一面積の9,165.3町歩となった。

この耕地開発は面積では種子島が多いけれども屋久島でも種子島のそれを凌ぐ程のものがあったようだ。その過程は明らかでないが明治20年の耕地面積を100としたとき昭和22年には種子島が170, 屋久島、口永良部島227となっている(県統計, 世界農林業センサス)。

(2) 小作地

種子島では明治25年に小作地の比率は30.7%にまで及んでいた。一方屋久島では全くみられないが、それは当時耕地が共有されていたことによろう⁴¹⁾。明治30年以後においては熊毛、馭謨両郡が1つの郡(熊毛郡)となったため両島のその後の経過は明らかでない。30年以後の熊毛郡の小作地率は全体として大きく低下した。明治30年19.5%, 同33年21.1%, その後昭和1年に23.3%になるまで10数パーセント台を上下している。そして昭和5年28.1%, 同12年の31.2%をピークにまた下向に転じている(鹿児島県統計書)。終戦直後には28.5%になり最も高い上屋久村では49%にもなった(昭和20年11月23日現在, 熊毛支庁資料)。畑の小作地率は殆どどの年度が水田を若干下廻っている。

熊毛郡は鹿児島県内では自作地率の高い郡であった(鹿児島県統計書, 明治30~昭和14年)。昭和22年においても自作農家の割合は揖宿, 鹿児島島の両郡について高い55.3%であった⁴²⁾。

高い自作地率, 自作農家率を可能としたものとして種子島にみられた^{*}牧の存在をあげることができよう。

種子島には牧⁴³⁾を共有する共同体が長期に亘って存続し、此の共同体が種子島村落の基本的性格を形成していたが、これが最終的に崩壊したのは第二次大戦後の農地改革によってであったという⁷³⁾。この牧はすべて凡そ「一里方の土地であったと推定するとき『全島此れ牧といふも可なり』と⁷⁴⁾」というように耕地として利用可能な広大な土地が存在していたために明治期において全国平均を大きく上廻る耕地開発を可能にしたのであった。そしてこのことが低い小作地率高い自作農家率をも可能ならしめたものであろう。

(3) 地主

耕地の所有について水田の場合をみると、地租改正当時、種子島の水田は西之表在住の土族達の所有となった部分が可成りあったようである。中種子町の「中

山の水田のうち良いところは西之表の土族のものであった。私が17,8歳頃(大正中期頃)までは西之表まで馬で小作米をもって行った」(中種子町, 石堂嘉平氏談, 昭和47年(1972)3月1日)地租改正当時土地所有をめぐる訴訟事件があったときの結末に「明治13年中南両村百姓ト西之表土族トノ間ニ土地ノ所有權ニツキ爭議ヲ起シ, 訴訟沙汰トナリシカ, 終ニ長崎上等裁判所ノ判決ニ依リ百姓ノ敗訴トナル⁵⁸⁾」, 「地主ハ大抵西之表ニ集マルモノナリト聞ク⁷⁷⁾」。

大正年間にはいるとこれら西之表の地主勢力は衰退してくる。

「今日コレ等地主ニシテ没落スルモノアリ, コレガタメ小作農家ニシテ自作農家ニ変ジ地主以上ニ土地ヲ所有スル者多シ¹⁸⁾」

「西之表の土族の田を買うのにその資金源となったのは砂糖と蕎麦の代金であった。大正年間養蚕が盛んになるまえは砂糖の景気が良かった。頼母子講が盛んであったが、頼母子講の掛金も砂糖乃至養蚕の収益が向けられた」(中種子町, 上門安也氏談, 昭和46年(1971)8月5日)。

第一次世界大戦によってもたらされた黒糖ブームを契機として地主層に変動が生じたようである。「大正から昭和の初にかけて特に大正年間に西之表の地主の力はなくなった。小作農家が頼母子講によって土地を購入していった。ところがその頼母子講が順調にいかず折角手に入れた土地が高利貸の手に渡っていった」(中種子町, 上門安也氏談, 昭和46年(1971)8月5日)。

種子島では高利貸について明治36年に「島の随一物産たる甘蔗糖の製造終りも稍々近まり高利貸にイデメられつつある吾々島民もホット一息つき出し申候(種子島短信)²⁸⁾」とあるように「由来金貸業者が頗る多く³³⁾」「金貸業者の悪辣なるは久しき事なるが両三年来に於ける行為は愈々悪むべき事なり…³⁴⁾」「本郡に於ける其〔金貸業〕の勢力は甚大なるものあり、結局は生産動力の馬を売却し更に家財に及び最後には農家生活の基調たる田畑を売却する破目に立ち至り所謂裸一貫となるもの逐日増加するの状態なり⁵²⁾」。昭和11年に負債整理に当たった時、最高は元金の39倍という例もみられた(中種子町, 上門安也氏談, 昭和46年(1971)8月5日)ように高利貸の手に土地が集積していったのである。昭和1年の統計では耕地所有50町歩以上17人, それに10町歩以上も加えると98人がみられるのもこのような動きのなかから生まれたものであろう。なかには次のような大地主も形成されたのであ

る。「高利貸にはもともと島内出身の人は1人だけでその殆んどは商人であった。中種子町の土地台帳に三和土地株式会社というのが沢山残っているが、これは高利貸同志がつくったもので大正から昭和にかけて中種子だけで集積した土地（山林が多かった）が1千町歩以上にも達していたようだ」（中種子町、上門安也氏談、昭和46年（1971）8月5日）。

「I産業は…高利貸をも兼ね林野耕地あわせて1,200～1,300haを集積し島内最高の地主であった。現在も山林地主としてもなお最大である⁵³⁾」。

第一次世界大戦期の砂糖ブームに端を発した農家の土地取得をめぐる行為は種子島の農業構造を大きく変化させ、それは他の要因ともあいまって昭和初期の甘蔗糖業、ひいては農業全体を衰退の方向へ転回せしめたのであった。

(4) 小作料

種子島は「日本一安い小作料」「小作爭議などはない²⁹⁾」という報道もみられたが、上述のような経過からして、やはり問題が表面化しなかつただけのことで小作農民にとって相当の重圧となっていたことに変わりはない。

畑の小作料にも色々あった。大正7年の調査によると「1、三ツ半作＝収穫高ノ $\frac{1}{3}$ ヲ地主ニ納メ残リ $\frac{2}{3}$ ヲ小作人ニ。2、四分六分、甘蔗作ニ限リテ行ヒ六歩を受クル小作人ハ栽培ヨリ製糖、更ニ販売スルニ至ル迄責任ヲ以テ行フ。3、田作ニオケル折半法ト同様ナルモ僅カニ甘蔗作ニ行ハレルコトアリ。4、年1反ニ対シテ壹円以上拾円ヲ上納ス、コノ法ハ開墾シテ新タニ小作スルトキ行ハレル¹⁹⁾」

大正7年頃までは物納が多かったが昭和14年の調査では「畑地ハ金銭デ小作料ヲ払フヲ普通⁴⁶⁾」とするようになった。そして「農作物安価ナ時ハ畑作収量ノ約2割ニモ達セザルガ如キ小作料ニシテ最多小作料ハ畑作収量ノ約3.5割ナリ、普通ハ3割ナリ⁴⁷⁾」というようになった。畑の小作料は金納が普通といっても甘蔗の場合は「砂糖何貫とか砂糖何樽とかいっていた」（中種子町、上門安也氏談、昭和46年（1971）8月5日）からすべての作物が金納にはなっていなかったようである。小作料が比較的安かったのはどうしてかという、1つには戦時経済にはいり人手不足が深刻化してきたこともあったであろうが基本的には「高利貸で土地を集積した地主から山林原野を借りて開墾する例が多く、そういう場合は開墾後1年間は小作料は納めなくてよかった。2年乃至3年目から納めるようになっていたが、地主は砂糖商人でもあり、小作人は小作料

以外の砂糖もこの地主である砂糖商人に売るのが普通であったから、地主としては小作料を若干安くしてもその方が得だという計算が働いていた」（中種子、町上門安也氏談、昭和46年（1971）8月5日）と考えられるのである。

甘蔗の場合「小作料自体は安く精々2割程度のも（中種子町、上門安也氏談、昭和46年（1971）8月5日）といっても甘蔗の場合は砂糖で納めていたから製糖過程がそれに加わるので小作農民としては大きな負担であったといえよう。畑の小作料も水田の小作料と切りはなされて存在したものではなかったであろうし、「一毛田では小作料率52%、二毛作田では50%であった⁴²⁾」という水田の小作料が甘蔗の場合も1つの基準としてあったとみるべきだろう。

6. 糖価の変動による糖業の攪乱

糖価の動きと栽培面積との関係については既に述べたので、ここでは価格の上昇や下落の下で生じたそれ以外の諸現象について敘述することとしたい。

明治26年頃は輸入糖の激増にもかかわらず「砂糖と云えば黒糖を意味し、卸商の扱いも博多の様な都会でさえ黒7対白3位の割合でしたでしょうか、とにかく…白砂糖は薬局で売っていた²⁰⁾」、明治中期頃までは「市場面で輸入糖との競合が比較的弱かった黒糖は特産的な商品となり、安価であったためある程度の需要は確保できた⁶⁸⁾」といわれたように比較的安定的な市場があった。加えて明治20年代後半から大正4年まで糖価はほぼ安定的に推移していた⁷⁰⁾から種子島でも大きな波乱はみられなかったようである。

大正4年は「活気立たず³⁵⁾」と新聞は報じているが翌大正5年末から上昇し始めた。砂糖の国際相場は1ポンド当たり、それまでの4セント前後から大正5年5.8セント、同6年6.2セント、同7年6.5セント、同8年7.7セント、同9年12.4セントへと大幅に上昇した。輸入価格も大正4年には1斤当たり7.8銭したのが5年9銭、8年13銭、9年には20.6銭と暴騰した。種子島では百斤5円であったのが10倍の50円に騰貴し、10何日かにおさまったということもあったという。（中種子町、石堂嘉平氏談、昭和47年（1972）3月1日）。

この異常な高値は大正9年第3四半期に急落した⁶⁹⁾。鹿児島での黒糖の値下がりはいずれより少し早く大正9年の新糖3、4月限100斤当たり42円50銭が3月5日には37円50銭に下落している。それでも6月にいたってなお百斤当たり31円見当の相場を維持していた³⁶⁾。

「大正13年にはじまる世界的糖価の下落は種子島にも深刻な影響を与え⁶⁵⁾」た。砂糖の国際相場は大正12年7セント、13年6セント、14年4.3セントとなり、それ以後は第二次大戦終結時まで3セントを割る年もみられたが殆んど年が3セント台で推移している。熊毛の糖業は昭和10年代初期にいくらか持ち直すような気配がみられたけれども戦争への突入もあって衰退傾向をとめることはできなかった。

国際糖価の下落は異状な生産増加に基づくものであった。「第1次世界大戦直後に生じた高価格は、著しく生産を刺激した。これはなんらの戦禍も受けず、加えて改良された栽培技術と多収量の新甘蔗品種に恵まれて、この当時発展の条件が備わっていた甘蔗糖国で出現した。1920年代の中頃から…価格は低落した。…1930年代の初めに生産の著しい低下を来した。1935年頃からの需要増による価格の立直りは、経済の好転につれて生産の上昇を刺激したがその後第2次世界大戦によって抑制された⁸⁰⁾」という総括は熊毛の糖業にも基本的にはそのままあてはまるのであるが、いまだし実態に則して述べておきたい。

国内に於ける甘蔗糖の生産量の増加は黒糖価格の低落に大きく影響した。昭和6年には「大茎種の普遍化によって沖縄に於て17,8万、大島に於て3,4万、合計20万〔挺〕見当の増収を予想され、且つ台湾に於ける分蜜糖の大増収とジャワ糖の大ストックなどがある。黒糖それ自体の増収は価格低落の直接材料であり、内外分蜜糖の大氾濫は必然分蜜糖の値下りを招き…黒糖相場の低落を間接に誘致すべきことは自明である³⁰⁾」と新聞は報じている。既に数年前から次のように安値の農家への影響、衰退の必然的傾向が指摘され、甘蔗糖業の振興の必要性も提起されていた。

「黒糖の十一円台と云へば去る大正8,9年来6,7年来の新安値であるが此相場を生産者側から観たら逆も涙も出ぬ程の惨状で³¹⁾」ある。西之表の「砂糖は同町に於けるの重要物産で町経済の根源をなすものであるが…昨年来価格暴落の爲当業者は多大な損失を蒙り他に転業せんとする傾向がある³²⁾」。「黒糖価格、低落ハ生産ニ好適ナラズ、日ヲ逐ツテ衰亡ノ傾斜面ニアリ…⁷⁹⁾」しかし「熊毛、大島ノ両郡ニ於テハ現ニ農家ノ重要作物ナルヲ以テ之ガ改良ニ努力スルヲ要ス⁴¹⁾」と。

当時黒糖の再生産が如何に困難な状況にあったかは西ノ表町の遠藤清三氏の黒糖生産の収支状況によってその一端をうかがうことができる。同氏は読谷山種5反歩を栽培し熊毛郡の甘蔗栽培者のなかでは中位の自作農家であったが、その蔗茎反当収量は1年目3.7ト

ン、2年目4.7トン3年目3.1トン、3ヶ年平均では3.8トンで黒糖生産量はそれぞれ270kg、360kg、240kg、3ヶ年平均すると年290kgであった。黒糖価格を百斤(60kg)当たり7.15円として収支計算すると1年目24.1円、2年目11.9円、3年目10.8円、3ヶ年平均すると毎年15.6円の赤字であった(大日本農会「農産彙報」第31号 昭和10年より算出)。このように引き合わないものになっていたにもかかわらず製糖が続けられたのは自給部分についての評価が自家労賃部分も含めて極めて曖昧であったことと、更に共同製糖であったので自給部分の評価を益々しにくいものになっていたためであろう。

第2次世界大戦が終った1945/46年度の世界の産糖量は新記録を達成した1939/40年度の2707万5000トンより33%も少ない1818万5000トンであった⁸⁰⁾そして砂糖の国際相場も昭和22年には1ポンド当たり6.2セントへと上昇した。

このように国際的な産糖量の激減と糖価の上昇があったとはいえ輸入が殆んどできなかったから国内産糖の相場は国際相場の上昇をはるかに上廻る異常な高騰を示した。

「大戦末期から戦後にかけての数年間には全くの砂糖饑饉で病人または育児用にさえ配給不可能となった…」、昭和24年になっても「原糖51万屯輸入、食糧配給公団の委託加工方式により操業したるも原糖供給の見通しなく、操業率は35%⁷¹⁾」でしかなかった。そして我が国最大の産地であった台湾が中国に復帰し、沖縄、奄美大島等が本土から分離され米軍の統治下におかれるようになったことと相俟って「種子島の黒糖は異常なブームをよび昭和24年には黒糖1斤400円という暴騰を示した⁶⁶⁾」

黒糖ブームによって次のような状況が展開された。

「特産物の砂糖は1斤300円余(落花生1斤150円余)、黒砂糖は極く普通の管理で反当300斤は容易にとれるので反当ざっと10万円、肥培管理が良いと20万円の収入もそう至難のことではなかった²¹⁾」。

「高値を示した当時は僅か3,4反の零細農家でも砂糖だけで大きな現金収入が得られるような状態にあった³⁾」。

「協定価格1斤90円、40斤入3,600円の黒糖が1万円から1万2千円で飛ぶように売れた。中種子農協では24年3月末、組合員平均1万円、2,400万円以上という預金レコードをうちたて、シーズンに入ると島内には一時に数億円の札束が舞い込み農夫たちは尺祝いにわが世の春をおう歌した…⁵⁵⁾」。

このような状況は数年間のことで、間もなく糖価は下落し始めた。25/26 年期の砂糖では次のようなことが起った。

「南方から良質砂糖がふんだんに輸入されるようになってから 1 斤 60 円でも買手がつかず各農協ならびに関係者間では黒糖の売りさばきに四苦八苦、去る 1 月農協に委託した黒糖が現在〔4 月末〕消化された程度で、大半はまだ農協倉庫に眠っており、農協に委託しては手ぬるいと各部落で組合をつくり直接京阪神の業者と取引をはじめたところもあり、これがため存廃の岐路に追いこまれた農協もでるさわざ、応急措置として 1 斤 50 円の割で生産者へ前渡金を渡している農協もある。現金収入の約 8 割をまかなうといわれる黒糖の不況は直ちに島民のふところにピンとひびき、ようやく金づまりが表面化…中には本春の製糖期が待ちきれず昨秋のうちに畑のまま 1 斤 30 円から 50 円〔黒砂糖に換算した価格〕の捨て値でブローカーに売り飛ばした農家も多い…⁵⁶⁾」。

糖価の値下がりには更にその後も続いた。「戦後は外貨事情および精糖設備の不足などにより当初は輸入量も少なく戦前水準に達したのは 1953 年⁸²⁾」であったが、種子島でも砂糖価格の下落は同じ昭和 28 年(1953)頃より顕著となり 30 年、31 年頃は 1 斤 40 円前後の値動きとなり⁴⁾、ここの糖業はまたもや困難に直面することとなった。そしてこの局面の打開は製糖資本の進出による解決の方向へと大きく動いていくこととなった。

注

- 1) 部落ノ土地ノ多クハ共同有ニシテ口分田ノ制ヲ立テ男子一定ノ年限ニ達スレバ一定ノ畑ヲ受ケ或年限之ヲ耕作スレバ荒シテ所謂休閒農法ヲ取り又焼畑式デアッタ 一方又他ノ土地ヲ分ケテ耕作シ(共有地ヲ分ケテ永久ノ個人有トシタルハ近年ノ事ナリ)個人ノ特殊ナル経営ヲ許サズ(財部十助「下屋久村農村調査」昭和 6 年(1931))。
- 2) 牧は少くとも 1352 年来 1901 年に至る間、凡そ 550 年にわたって種子島の社会経済を特色づけたもので、それは原始共産的な性格のものであった。そして最終的には戦後の農地改革によって解体された。牧は部落各戸の炊事用や砂糖製造の際の燃料、建築用材として利用されると同時に防風林の役割を果たし更に、採草地としても利用された(大山彦一「南西諸島の家族制度」29 ページより)。このほか牧は放牧地としても利用されていた。上門家は明治の末頃は 27, 8 頭の馬を放牧していたし、大正時代になってからも 8 頭の馬を放牧していた。地租改正のとき所有権が国に移ったところが可成りあったようだが、それ以後も放牧は自由にできた。なかには再び国から返還してもらったものもあり、(明治 12 年官有地に編入せられる、31 年曲田の上、以下二十余筆の下戻しを官に申請す。許可されること三十六年五月廿二日を以てす(中種子町郷土誌 487 ページ、昭和 46 年)農商務省が出した書類には此の土地は何々部落永代繁栄のために返すと書いてあった。現在ではその土地は一部

分割したが、まだ大部分は残っている。部落に電灯をつけた時も牧の木を売ってその資金にあてたりした(中種子町、上門安也氏談、昭和 46 年 8 月 5 日)。

文 献

- 1~4) 有留勉：熊毛農業に於ける甘藷、甘蔗の占める経済的地位と動向(1957)
- 5~12) 大日本農会：農産彙報, 31 (1935)
- 13) 樋口弘：日本糖業史, p.232. 内外経済社, 東京(1956)
- 14~19) 石黒清：北種子村調査書(1918)
- 20) 井上喜代一：明治前期の砂糖商売・糖業事典, 内外経済社, 東京(1959)
- 21) 今平英治：熊毛農業の現況と将来(1950)
- 22) 鹿児島県農会報, 11 (1925)
- 23) 鹿児島新聞, 昭和 5 年 3 月 21 日 (1930)
- 24) 同, 昭和 8 年 2 月 21 日 (1933)
- 25) 同, 昭和 8 年 2 月 21 日 (1933)
- 26) 同, 昭和 10 年 3 月 23 日 (1935)
- 27) 同, 昭和 5 年 3 月 21 日 (1930)
- 28) 同, 明治 36 年 2 月 25 日 (1903)
- 29) 同, 昭和 11 年 1 月 18 日 (1936)
- 30) 同, 昭和 6 年 12 月 29 日 (1931)
- 31) 同, 大正 15 年 3 月 27 日 (1926)
- 32) 同, 大正 15 年 4 月 15 日 (1926)
- 33) 鹿児島朝日新聞, 大正 15 年 4 月 15 日 (1926)
- 34) 同, 大正 5 年 2 月 27 日 (1916)
- 35) 同, 大正 4 年 1 月 21 日 (1915)
- 36) 同, 大正 9 年 3 月 9 日及び 6 月 3 日 (1920)
- 37) 鹿児島実業新聞, 明治 36 年 11 月 21 日 (1903)
- 38) 同, 明治 36 年 10 月 3 日 (1903)
- 39, 40) 鹿児島県農業試験場：種子島における甘蔗栽培の経営的性格 (1953)
- 41) 鹿児島県：昭和 4 年産業方針書 (1929)
- 42) 鹿児島県農地改革史, p. 465 p. 587 (1953)
- 43) 鹿大農学術報告, No.30, 300(1980)
- 44~47) 河野長平：南種子村農村調査 (1939)
- 48, 49) 茎永郷土誌, p.94 (1973)
- 50, 51) 熊毛支庁：熊毛郡沿革誌, p.91 (1932)
- 52) 同, p.142-143
- 53) 町田洋・江波戸昭：薩南諸島における地域経済の展開・薩南諸島の総合的研究, p.78, 明治書院東京 (1969)
- 54) 南日本新聞, 昭和 28 年 8 月 3 日 (1953)
- 55, 56) 同, 昭和 26 年 4 月 28 日 (1951)
- 57) 南種子町郷土誌, p. 58, 南種子町 (1960)
- 58) 中種子町郷土誌, p. 371・中種子町 (1969)
- 59) 西之表百年史, p.185, 西之表市 (1971)
- 60) 同, p. 15-16
- 61) 同, p. 178 及び鹿児島県農業試験場：熊毛支場のあゆみ (1978) 参照
- 62) 西之表百年史, p. 179-183 (1971)
- 63) 同, p.259
- 64) 同, p.184
- 65) 同, p.185
- 66) 同, p.186
- 67) 西之表糖業調査, 昭和 46 年 11 月 25 日 (1971)
- 68) 日本食品産業発達史, 18, p. 157. 交詢社出版局, 東京 (1967)
- 69) 同, p.157
- 70) 日本経済統計集, 日本評論社 (1958) 及日本帝国統計年鑑, 東京リブリント出版社 (1967~72)

- 71) 日本の甘蔗糖業, p.123 日本甘蔗糖工業会, 東京(1962)
 72) 沖縄県立糖業試験場: 甘蔗小翅椿(1924) 岡島銀次・飯島祐次郎: 恐るべき甘蔗の一新害虫に就て(第二報), 農学会報 No.248 (1923)
 鹿児島朝日新聞, 大正15年2月17日(1926)
 73) 大山彦一: 種子島マキの研究, 南西諸島の家族制度の研究マキ, ハラ調査, p.9, 関書院, 京都(1960)
 74) 同, p.25-26
 75) 財部十助: 下屋久村農村調査(1931)
 76) 同
 77) 同及び財部十助: 下屋久村ニ於ケル甘蔗農業ノ調査(1931)
 78) 財部十助: 下屋久村農村調査(1931)
 79) 同
 80) 世界糖業の概観, p.41, 日本精糖工業会, 東京(1964)
 81) 同, p.55
 82) 戦後日本貿易20年史, p.220, 通商産業調査会, 東京(1967)

Summary

In this thesis, home-made-sugar manufacturing industry after its revival was considered.

The period after the Revival covers over half a century, therefore, concerning the materials which are indispensable for the study, it is almost impossible even to find them, excepting those occasion when conspicuous events were brought about.

The substance of the consideration is as in the following.

- I. Situation of sugar-cane industry.
- II. The growing area of sugar-cane and the quantity of sugar production.
- III. Technical improvement.
- IV. Land-problems in the sugar-cane industry.
- V. Disturbance of sugar-cane industry due to the fluctuations in the sugar-price.

The situation of this sugar manufacturing industry has always been staple through half a century.

In the technical aspect, introduction of new kind of sugar-cane, improved manuring method and improvement of manufacture have been put into practice. The yield and the productivity of labour have been raised by these series of improvements.

On the other hand, dissolution of the community originated from the land-tax was spurred by the usury, and this dissolution of the community has been converted into the one of main checking factors against development.

Changeable sugar-price has been the obstacle of the development too.

These obstacles were solved partially by the agrarian reform after World war II and by the price policy adopted after the liberalization of raw sugar import, but this sugar-industry has still been handicapped by the originally backward condition because of the fact that the agriculture at this district as a whole, has not yet been founded on a steady base.

Note: Table 1. a) Planted area of staple crops
 b) Planted area of sugar-cane
 c) $\frac{\text{Planted area of sugar-cane}}{\text{Upland field area}}$
 d) $\frac{\text{Planted area of sugar-cane}}{\text{Planted area of staple crops}}$
 町 (cho) = 9917m²